



## 武田力 Riki Takeda

### 演出家、民俗芸能アーカイバー

立教大学で初等教育学を学び、幼稚園勤務を経て、演劇カンパニー・チェルフィッチュに俳優として参加。欧米を中心に活動するが、東日本大震災を機に演出家となる。

「警察からの指導」「たこ焼き」「小学校の教科書」など日常に近い物事を素材とし、観客とともに現代を思索する作品を展開する。また、演劇の手法を用いた過疎集落における民俗芸能の復活／継承も各地で手掛け、その経験を活かして「農」と「アート」の関係性を実践を通して研究する奥八女芸農プロジェクトに参画する。

近年はフィリピンの国際演劇祭・Karnabalや、中国・上海の明当代美術館で滞在制作を行うなど、その活動を拡げている。

2016, 17年度アーツコミッション・ヨコハマ「創造都市横浜における若手芸術家育成助成」に選定。2019年度に採択を受けた国際交流基金「アジア・フェローシップ」では、フィリピンとタイにおける民俗芸能とアートの関係性をリサーチした。九州大学芸術工学部非常勤講師。

-index

- 1 - 教科書カフェ(2019-)
- 2- たこを焼く(2017-)
- 3- 踊り念仏(2015-)
- 4 - わたしたちになれなかった、わたしへ(2014-)
- 5 - そらには やんわり うかんでる(2012-)

# 1

## 教科書カフェ

小学校での教育は多くの方が経験したことかと思いますが、その教育体験を丁寧に紐解くと、一人ひとりで随分と異なります。人間が生きていく上で普遍的な営みである教育は受け継がれてきた環境や価値観によって、つまりはこれまでの歴史を解釈する人間によって変化します。いま世代間や地域間に生じている分断は経験してきた教育の違いかもしれません。

この《教科書カフェ》では、日本各地／各時代に子どもが実際に使っていた落書きや書き込みのある教科書を自由に読み比べたり、設置された公衆電話に掛かってくる小学生からの教育に対する問いに答えることで、他者の考え方の源泉を探ります。追憶に眠る「小学生のあなた」の視点から、それより過去の、そして現在の教育のあり方を感じ取ること。その思索は、日本という国家が歴史や時代をどう

解釈し、どういう国民を育てたいと意図してきたかをたどる旅でもあります。日本には国による教科書検定があり、それに合格しなければ小学校をはじめとした公的な教育機関で用いることはできないからです。

《教科書カフェ》では、子どもの頃のように教科書を通じて教育を受けるのではなく、教科書を素材に自ら学び、発見していくことで、他者の理解をはかります。その先に、近年よく耳にする「持続可能な未来」はあり得るのでしょうか？「わたしたち」を持続させるのは国ではなく、一人ひとりであるあなた自身なのです。

### - 作品履歴

2019. 10 奈良・町家の芸術祭 はならあと2019

2020. 4 さいたま国際芸術祭2020

※ 新型コロナウイルス感染拡大の影響から、パフォーミングアーツ部門であった本作は中止

2022. 7-9 HUB-IBARAKI ART PROJECT

2023. 7-11 東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて」展

### - 映像

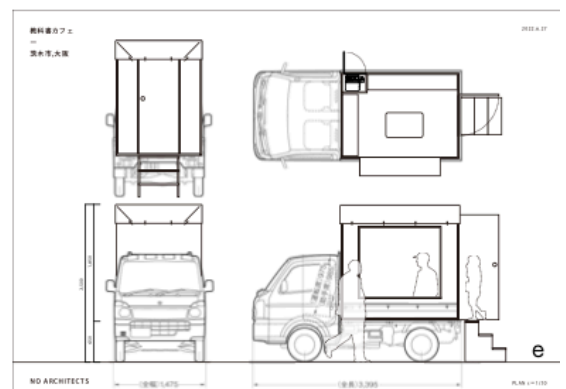
[https://www.youtube.com/watch?v=f\\_qCwpvCYdM](https://www.youtube.com/watch?v=f_qCwpvCYdM)

### - 画像

a-b 奈良・町家の芸術祭 はならあと2019 より

©2019, Nara/photo by Kenji Seo

c-d HUB-IBARAKI ART PROJECT より



# 2

## たこを焼く

フィリピンの人たちはタコを食べません。たこ焼きはこの国の経済成長と並走するように人気の食となりつつありますが、そのたこ焼きにはタコが入っていません。

タコは様々な意味を帯びてきました。覇権国家による大陸侵略を批判する風刺画に。春画における性交中の男性に。一方では福を呼ぶ生物として儀式儀礼にも用いられます。

ところで、日本は先の大戦でフィリピンを統治し、捕虜や民間人を含めて多くの方が亡くなりました。その戦争から80年近くが経つ現在も、マニラ湾にはたくさんの船と遺体が沈んでいます。タコは隠れられる場所を住処とします。遺体も食べます。

なにを次代に継ぐ和解とし、ともに更新していけるのか？ 移動式屋台を〈劇場〉に、出会いを生み出したこ焼きを〈俳優〉に、道ゆく人たちを〈表現者〉にと巻き込みながら、国家や資本経済とは別種の仕組みを構築するスラムへ。侵略と抵抗の両義を持ち、戦没者を食して生きるタコに、観客一人ひとりが思う「戦争」を重ねて体内に宿すことで、戦争記憶の継承を図ります。

### - 作品履歴

2016. 8 象の鼻テラス (横浜) ※ワークインプログレスとして上演

2016. 11 明当代美術館 (中国・上海) ※ワークインプログレスとして上演

2017. 5 Karnabal Festival (フィリピン・マニラ)

2018. 5 釜ヶ崎芸術大学 (大阪)

### - 映像

<https://youtu.be/fJX2vq0g6cM>

### - 画像

a-e 映像 「CNN Philippines」 によるインタビュー より

2017, Manila/film by Samantha Lee ©CNN Philippines



# 3-1 踊り念仏

横浜市の山手警察署員との会話（抜粋）

署員 演劇...どんなものをやるんです？

武田 お客さんが俳優になって、そのお客さんがこの街を歩く作品です。

署員 いま外を歩いているじゃないですか。その人たちを...。ごめんなさい、ちょっとよくわかってない。

武田 いま話を伺って、聞き取ったその基準をそのまま「条件」としてお客さんへ伝えて、普段とは違う感覚でこの街を歩いてもらおうと。

署員 それはなんのためにやるんですか？「これから街の異物になろう」とお客さんがバラけるじゃないですか。それで戻ってきて「どうだった？」という話？

武田 個々人が無意識に規定している「日常の線引き」を改めて捉え直す試みなんですよ。 「歩く」行為と「パフォーマンス」行為との違いはどこにあるんですか？

署員 「パフォーマンス」と「歩く」？

武田 という行為の違い。みんな歩いていますよね？

署員 いや「道路使用」として、なにをするかがわかっていればまだ...

武田 「表現の自由」は憲法で規定されているじゃないですか？それとは抵触している...

署員 それは「〈個人の〉表現の自由」で、たとえば「変なことやってるなあ」という人がいるじゃないですか。それはその人の自由なんですけれども、それを集団でやるとなると...

武田 個人だったら良い？

署員 ちょっと難しいですよ、警察として「良いですよ」というのは。面白いとは思いますが...

武田 わかりました。ありがとうございました。



# 3-2

「主体的に都市や社会と関わろうとする行為」を、この作品では「踊る」と呼びます。わたしたちは日々都市や社会と踊っているのか、もしくは無意識のうちに都市や社会に踊らされているのか。

道路交通法77条によって禁止されている「各公安委員会の定める一定行為」とは、どのような行為を指すのか？各公安委員会＝その地域の警察署で「この土地における一定行為とはなにか」を質問し、その模様を録音。文字起こしをした上で、当日参加する観客に配布します。そして、観客一人ひとりがその聞き取った内容を自身で解釈をし、異物としてその都市／社会と対峙します。そのとき、どのような身体で以って都市／社会との関係の再構築を図れるのか？これはそもそも「踊る異物」であったわたしたちが、都市や社会との相互関係性を取り戻そうとする作品です。

## - 作品履歴

2015.2 神奈川・井土ヶ谷 (Blanclass 共催事業)

2015.2 神奈川・横浜 (ST スポット横浜 主催事業)

2015.4 大阪・此花 (無職・イン・レジデンス 協働事業)

2015.12 神奈川・本牧 (本牧アートプロジェクト 主催事業)

2018.8 東京・阿佐ヶ谷 (TERATOTERA 主催事業)

2020.10 大分・大分 (大分県立美術館 主催事業)

## - 映像

<https://www.youtube.com/watch?v=a0E1TD-ytf8>

## - 画像

a-e 大阪・此花での『踊り念仏』より

©2015, Osaka/photo by Seiji 'Takakhan' Takahashi



# 4 わたしたちになれなかった、わたしへ

今ここに在る「わたし」。

それは国や民族、言語等に規定された「わたしたち」を前提に形成されています。では、劇場という新たな「わたしたち」を形成していく場で、個としての「わたし」への回帰を促されたとき、どのような「わたし」たちが形成されていくのでしょうか？ この作品では公に善しとされる「わたしたち」を正義とし、その一方でこれまでの人生で虐げられ、忘れ去られてきた「わたし」の再表象を観客とともに目指します。

複数に繋がる糸電話に届くのは、知らない誰かの声。あなたはそれに応えることができます。そして、あなたの声を誰かに届けることもできる。どのような「わたし」として声を聴き、届けるか。あなた自身が「わたし」を演出をしながら、または誰かに演出されながら、「わたし」たちはか細い声を頼りに繋がり、開かれていきます。

## - 作品履歴

2014.11 トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバルVol.9  
(トーキョーワンダーサイト主催事業)

2015.10 奈良・町家の芸術祭 はならあと2015  
(奈良・町家の芸術祭 HANARART 実行委員会 主催事業)

## - 映像

<https://www.youtube.com/watch?v=zHnkuF3Rd8o>

## - 画像

a, b トーキョー・エクスペリメンタル・フェスティバルVol.9 より

c, d, e 奈良・町家の芸術祭 はならあと2015 より

©2015, Nara/photo by Koichi Wakui



# 5

## そらには やんわり うかんでる

7歳の子どもたちに、92歳までの「時間」と「問い」を渡しました。子どもたちはその問いの応えを考えながら、彼らの住まう未来の街を砂場に築いていきます。

その未来は5年後、子どもたちが12歳の時点から始まります。総務省は彼ら2008年生まれの平均寿命を92歳と想定しています。子どもたちに渡した問いは、日中戦争勃発により開催を辞退したーいまや「幻」とも形容されるー1940年東京オリンピック以降の歴史に基づいて構成されています。

彼らの多くが死を迎えると想定される2100年は「1940年に12歳」とすると、ちょうど2020年。つまり本作は「未だ見ぬオリンピック」を起点に、92年の人生を生きる子どもたちに1940年から2020年までの歴史を、未来として問い掛けます。彼らは先人の辿った道を未来としてどう捉え、生きるのでしょうか？<sup>1</sup>

### - 作品履歴

2012.10 横浜市立青木小学校にて制作

(横浜市芸術文化教育プラットフォーム事業)

2015.10 パドマ幼稚園にて制作

(大阪/應典院 主催事業)

### - 映像

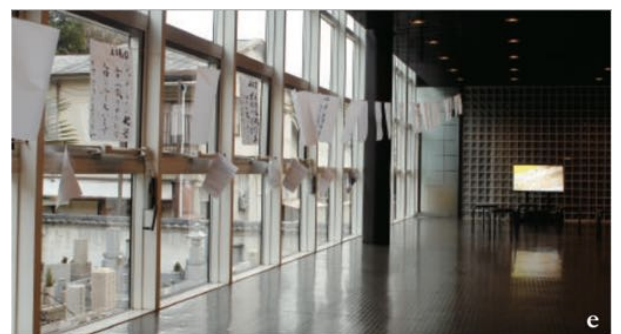
<https://www.youtube.com/watch?v=hwiQmMit6CI>

### - 画像

a, b, c, d 映像「そらには やんわり うかんでる」より

©2015, Osaka/film by Masumi Kawamura

e 應典院 コモンズフェスタ 展示風景 より



<sup>1</sup> この文章は、2021年に開催された東京オリンピックの6年前、2015年に執筆した。